

『東大寺諷誦文稿』の文体について

——附・『東大寺諷誦文稿』段落一覧——

小林 真由美

一、はじめに

『東大寺諷誦文稿』（旧国宝・佐藤達次郎旧蔵）は作品名ではなく、『華嚴文義要訣』⁽¹⁾巻第一の紙背に書かれた、長短さまざまな文章や文句からなる三九五行の文書につけられた書名である。複製本刊行以前には、はっきりと読み取れる最初の四文字をとって、「宿（昔）世殖善の文」とも称されていた。山田孝雄は「本邦における最古の仮名交じり文」であるという「昔世殖善の文」を三十有余年求め続け、一九三七年に文部省国宝調査室でついに巡り会えたという。⁽²⁾『東大寺諷誦文稿』は旧蔵者であった鵜飼徹定の名付けで、一九三九年の

複製本刊行時に『東大寺諷誦文稿』と命名されたようである。⁽³⁾原本は一九四五年四月の戦火によって焼失し、『東大寺諷誦文稿』は複製本の影印のみが我々の手に残された。複製本刊行後、橘純一、亀井孝、築島裕らによって国語学的研究が進められ、一九六九年に影印・釈文・読み下し文及び詳細な調査報告を掲載する中田祝夫著『東大寺諷誦文稿の国語学的研究』（風間書房、一九七九年に改訂新版刊行）、二〇〇一年に築島裕編『東大寺諷誦文稿総索引』（汲古書院）が刊行された。

『東大寺諷誦文稿』の成立は、弘仁元年（八一〇）を上限とし、天長承和年間（八二四～八四八）頃と推測される。⁽⁴⁾文章経国思想のもと漢学研鑽の風潮が高まり、仏教界では新教

団の真言宗・天台宗が台頭した時期である。訓点史の上では、奈良時代末期から漢訳仏典に返読の符号や萬葉仮名・草仮名・省画仮名が記入されるようになり、九世紀初頭頃からヲコト点、片仮名が使用されるようになった。短文の漢字片仮名交じり文が、天長期（八二四～八三四）頃とされる西大寺本『金光明最勝王經』平安初期点や『金光明最勝王經註釈』（飯室切）平安初期点の中に見出されている。⁽⁶⁾ほぼ同時期の『東大寺諷誦文稿』に、早くも数十行に及ぶ長文が片仮名交じり文で記述されていることに驚かされる。

平仮名は片仮名よりも少し遅れて九世紀後半以降に成立した。平仮名の普及も非常に早く、十世紀初頭には勅撰和歌集『古今和歌集』が撰進された。『古事記』の太安万侶の序文に、天皇の御代はそれぞれ「歩むと驟く（おのゝとこ）と各異にして」とあるが、九世紀は、漢字伝来よりゆつくりと歩んできた日本の書記言語が、一気に「驟く」時代であった。

『東大寺諷誦文稿』は、全文が一人の筆によるものと思われるが、筆致の変化や不定な行間の空け方から、一気に書かれたものではなく、文章を書き連ねていく間に時間的経過があったものと思われる。最も長いまとまりのある文章が80行から122行までの43行で、10～20行程度のまとまりが十数か所、

あとは数行の文章、短文や語句の列挙などである。仏典・漢籍をそのまま書写、引用したと思われる文章はなく、全体に削除訂正や書き入れが多く推敲の跡がみられるため、ほぼ全文、筆者が書き下ろした文章や覚書と思われる。

文章や語句の雑多な集積とも見える本文を整理するために、次の条件を区切りとして「段落」とし、段落一覧表を作成した（23頁、『東大寺諷誦文稿』段落一覧）。

- ・前行との間に空白行を挟んでいる個所
- ・鉤点が打たれている個所
- ・改行され、内容が改められている個所

これらの条件以外で段落の区切りとしたのは、204～207行（第55段落）と204行～206行（第56段落）、259行～261行（第71段落）の3か所である。204行の末部「孔子美玉云」から連絡線^③で結ばれた206～207行を第55段落とし、204～206行の囲み線で囲まれている部分を第56段落とした。第71段落は、259行上部、3字分ほどの空白を開けて異なる内容の文が始まる個所から、261行までとした。

また、内容や書き方に連関があり、まとめることができる段落は「章段」とし、表の左端に示した。なお、「章段」の区切りの基準は私見によるものである。

文章の内容は、追善供養などの仏事法会に関すると思われるものや、仏教の教義を解説するものなどである。山田孝雄は『東大寺諷誦文稿』複製本解題に「恐らくは法会の為に用ゐらるべき表白又は教化の文の例案として起草を試みたるものなるべきものなり」と述べている。唯識に関する記述があることなどから、筆者は南都法相宗に関わりのある人物と推測されている。築島裕は、「他に例を見ないような、変わった」仮名字体があることや、特異な語彙や語法の多用などから、「非常に変わった文献と考えられる」と評している。⁽⁹⁾

二、文体と表記

『東大寺諷誦文稿』には、次の55行のようにまったく片仮名がない漢文のみの段落もある。「東大寺諷誦文稿」段落一覧の「仮名」の欄に「無」と表示した段落である。

55 帝釈宮玉柱衆生善惡自然現祇桓寺石鏡徧禍忽現⁽¹⁰⁾

しかし、多くの段落には小字の片仮名で助詞・活用語尾・漢字の読み仮名などが書き入れられている。「段落一覧」の

「仮名」の欄に、片仮名の書き入れがない段落は「無」、一行につき一か所以下の段落を「少」、それ以上の書き入れがある段落は「有」とした。

片仮名の使用量は段落によってばらつきがあるが、記載形式はほぼ一定している。漢字を大字で記し、片仮名を小字で漢字の傍や下部に書き入れている。つまり、漢字の傍に仮名を書き入れる訓点の方式と、漢字の下部に仮名を書き入れる宣命体の方式を併用している。⁽¹¹⁾ 最長の章段である80～122行（第29～31段落、第17章段）には、同一人物によると思われる朱筆の書き入れがあり、ヲコト点や返り点などが打たれているが、片仮名は墨書と同じ方式で書き入れられている。

表記と文体の例として、片仮名の使用が比較的多い67～74行（第26～27段落、第15章段）を挙げる。見出しに「自他懺悔混雑言」とあり、人の身の無常を詠嘆する内容である。69行と70行の間に一行分程の空白があるが、内容に共通性があるため、74行まで一続きの文章であると考えられる。（図1参照）

67 四ノ蛇ノ迫来^{自他懺悔混雑言}タル時ニハ 虚空雖寛而廻首无方 二鼠迎

来時大地雖広而隱身

- 68 无処 尊モ卑モ 五龍之殘ヤフレ未脱 愚モ智モ 四山之
怖未離 春花ハ不附
69 秋枝ニ 幼時之紅顔ハ 不見老体ニ

- 70 此身ハ尽財而着嚴トモ都无一益モ⑨↓掣ツカマヘ頸掣胸
修テハ功德ヲシ 自然生善キ

- 71 所ニハ⑩↓ 貧人ハ生時被飢寒之恥 命終後ニハ 不
足一尋葛繞頸 此ヤ此ノ

- 72 郷穢家穢ト云テ 指有犬鳥之藪引弃 扣虚額无乞哲助人
73 ↑⑩追テ反トモ 不可反者年月ナリ 乞祈百年千年モカト誰

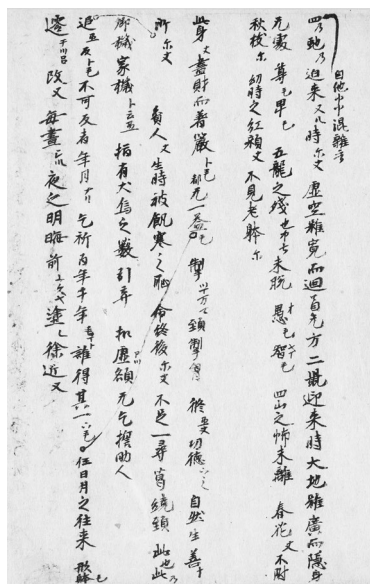


図1 (67～74行)

- 74 遷ウツロ改ヌ 每昼ヒル夜之明晦前ユクサ塗モ徐近ヌ
得其一ヲモ↑⑨任日月之往来 形体モ

仮名の多くが宣命体の方式で語の下部に小書きされているが、宣命のような和文ではない。67行～69行の仮名を取り除くと、次のような漢文になる。四六文ではないが、対偶をなした駢儷文である。

四蛇迫来時、虚空雖寛而廻首無方、
二鼠迎来時、大地雖広而隱身無処。

尊卑五龍之殘未脱、

愚智四山之怖未離。

春花不附秋枝、

幼時之紅顔不見老体。

「四蛇」「二鼠」は『仏說譬喻經』などの仏典に多見する無常の譬喩で、『萬葉集』巻第五の山上憶良の文章にも用いられている。「五龍」「四山」は仏教語の「五蘊」「四苦」の譬喩であろう。

『東大寺諷誦文稿』の文体は、文字表記の面からは漢字片

仮名交じり文であるが、語彙語法の面からいえば、漢文に読み仮名や送り仮名などを書き込んだ漢文訓読文である。原則的に、漢字は漢文の語順で書かれ、片仮名は漢字に付随する位置に小書きされている。

70行～73行の連絡線⑨と⑩の間の文には「此や此ノ」「百千年モガト」など非訓読的な表現が交じるが、その後また「日月ノ往来スルニ任ニ、形体モ遷ヒ改リヌ。昼夜ノ明ケ晦ル毎ニ、前ノ塗モ徐ク近ヅキヌ。(任日月之往来、形体遷改。每昼夜之明晦、前塗徐近。)」(73～74行)と、駢儷文の訓読文になる。

片仮名の使用状況を見ると、八行のうちに四十一か所に書き入れられている。「ノ」「ニハ」「モ」などの助詞が二十七か所、助動詞「ヌ」「ナリ」が四か所、形容詞の活用語尾「善キ」が一か所、動詞を含んだ「家穢ト云テ」が一か所。語の読み全体を書いているのが「残ヤフレ」「掣ツカマヘ」「昼ヒル」の三か所で、すべて漢字の下部に書かれている。「愚^オ」「智^チ」「虚^{イッ}」「遷^{ウツ}」「前^{マエ}」「ユクサ」の五か所は、語の読みの一部だけを書いている。「愚^オ」「智^チ」「虚^{イッ}」だけが漢字の右傍で、ほかの仮名はすべて漢字の下部に書かれている。

仮名を小字で漢字の下に書くのは宣命体の方式であるが、

西大寺本『金光明最勝王經』(平安初期点) 卷第五紙背の漢字片仮名交じり文も、漢字の下に片仮名を書き込んでいる。⁽¹³⁾

文 若^ニ水ノ中ノ月ノ行^{ストハツ}「菩提ノ行ヲ」ソエニ我亦行シキ菩提ノ行ヲ

此自見也意云観唯識行菩提我亦能行云也此依他破文也
余四モ喻准此之

文 若水ノ中ノ月ノ行^ニカム菩提ノ行ヲ「我モ行シキ菩提ノ行ヲ
此破意難得先方好也

片仮名交じりの二文は経典本文の別訓を二案書いているもので、『東大寺諷誦文稿』と同様に漢文訓読文である。漢字と仮名を同時に書いていく場合は、漢字の下部に仮名を書くことが自然であり、祝詞や宣命の書記方式を直接引き継いでいるわけではないことがわかる。

『東大寺諷誦文稿』67～74行は、おそらく筆者ははじめに、漢文とその訓読文を同時に案出しながら、漢字と片仮名を用いて文章を書き下ろした。その後、推敲し、漢字の読み仮名として「愚^オ」「智^チ」「虚^{イッ}」の傍訓と、省略の符号として連絡線⑨⑩を書き込んだ。片仮名の位置が漢字の下部と傍にばらつ

いていることから、このような作業過程が想像される。

『東大寺諷誦文稿』において、動詞は大字の漢字で書くのが原則だが、72行の「郷穢家穢ト云テ」は、動詞の「云」まで小字で書きこんでいる。類例の例は「无トイフトモ」(37行)、「財トッハフ」(175行)などしばしばみられる(「ハ」は「宣」の略符号)。平安初期の訓読では通常、「云」「曰」を「イハク、…トイフ」と、文末に「トイフ」を補読して訓んでいた。そのため、訓点資料には「トイフ」「トイヘリ」という片仮名小字の書き込みが散見する。『東大寺諷誦文稿』の筆者もそうした書き込みに慣れていたため、「ト云フ」「トハフ」などを訓点の補読のように小字で書き込んだのであろう。

連絡線で挟まれた部分を除いて、67〜74行を読み下す。

四ノ蛇ノ迫リ来リヌル時ニハ、虚空寛シト雖モ、首ヲ廻スニ方无シ。二ノ鼠ノ迎ヘ来リヌル時ニハ、大地広シト雖ドモ身ヲ隠スニ処无シ。尊キモ卑シキモ、五龍ノ残レヲ脱レズ。愚モ智モ、四山ノ怖レヲ離レズ。春ノ花ハ秋ノ枝ニ附カズ。幼時ノ紅顔ハ老体ニ見エズ。此ノ身ハ財ヲ尽シテ着巖レドモ、都テ一ノ益モ无シ。日月ノ往来スル任ニ、形体モ遷ヒ改リヌ。昼夜ノ明ケ晦ルル毎

二、前ノ塗モ徐ク近ヅキヌ。

(64〜67行)

片仮名で助詞助動詞等が丁寧に書き込まれているため、誰が読んでもほとんど同じ日本語文として再現することができる。筆者は片仮名を駆使して、自らの意図する日本語を表記したのである。

奈良時代以前に書かれていた日本語文として、萬葉仮名を使用した祝詞や宣命、萬葉仮名文書などが伝存しているが、主に用いられていたのは訓読を前提として書かれた和文的表現の混入する漢文、すなわち変体漢文であったと思われる。日常的に漢文に携わっている者にとつて、変体漢文は簡潔で扱いやすく、意を伝達することに不自由を感じない文体であったと思う。変体漢文は平安期以降の記録体に引き継がれ、実用的な文体として長く活用された。

ただし、変体漢文は相手に訓読をまかせるものであるため、日本語として細やかな表現をすることは難しい。片仮名は万葉仮名と違って小さく手早く書けるため、訓点の記入に便利であったばかりでなく、作文をする際の日本語表記も容易にされた。片仮名の普及によって、『東大寺諷誦文稿』にみられ

るように、漢文で培った文章力を生かしつつ、日本語としての表現の幅を広げて作文することができるようになったのである。

三、漢文体としての分類

前述のように、『東大寺諷誦文稿』の文章は日本語で読むための文章であるが、原則的に漢文訓読文である。正格の漢文とは異なる部分も多いが、基本的に漢字は漢文の語序で書かれ、片仮名は漢字に付随するかたちで書かれている。つまり、日本語文ではあるが漢文から独立していない。文字の大きさに現れているとおり、漢字が主であり、仮名が従である。その点において、前掲の西大寺本『金光明最勝王經』紙背の二文と同様である。

『竹取物語』『伊勢物語』などの初期の仮名文は、漢文訓読調が強いことが指摘されている。仮名文の一つの達成点と評される『古今和歌集』仮名序も、駢儷体風の表現を含む文章である。しかし、漢文訓読文とは異なり、そのまま漢文に還元できる文章ではない。仮名文において、平仮名は文字として漢字と同格の扱いを受けている。『東大寺諷誦文稿』の漢

字片仮名交じり文との根本的な違いである。

『東大寺諷誦文稿』段落一覧」の「漢文体」の欄は、本文を片仮名を除いた漢文の状態で分類したものである。対句を中心に構成されている駢儷文の段落を「A」、一部に対句、または対句に近い句が含まれている段落を「B」、対句がみられない文章の段落を「C」、語句や単純な短文のみの段落を「D」と表示した。

『東大寺諷誦文稿』は「法会の為に用ゐらるべき表白又は教化の文の例案」（山田孝雄「解題」）、「法会の願文類の集録の草稿」（『日本古典文学大辞典』¹⁴）等といわれている。「願文類」の文章は駢儷文で作成されるため、Aの段落が該当する。表に示したように、駢儷文による文章・文句のAの段落は18段落、合計161行で、全395行の四割以上の行数を占めている。

父母追善や無常を説く内容が多い。また、一部に対句や、字数が整っていないが対句的な表現を含むBの段落も多く、27段落96行である。

前節で例示した67～74行（第26・27段落）はAに分類され、頭語も末語もなく完全な文章ではないが、願文類の文章の一部分として書かれたと考えてよいであろう。前掲の55行（第18段落）は字数がそろわないが対句風の構成で、Bに分類さ

れる。願文類に使用するための試案メモであったかもしれない。他にも、38～39行（第20段落）、253行（第68段落）、254～255行（第69段落）など、対句の試案と思われる1～2行の書き込みが散見する。

九世紀前半の願文類としては、『性靈集』巻第七・八に空海の願文・表白・達囀文が残されている。¹⁶『枕草子』「文は」に「願文、表、博士の申文（奏状）」の三つが挙げられ、「めでたきもの」に「願文、表、序」が挙げられているように、願文・表・奏状・序は、平安時代に作られた漢文の中の主要な文章であったという。¹⁷『東大寺諷誦文稿』の筆者が願文類の作成に注力していたことは、Aの段落に推敲の痕跡が多いことからうかがえる。『東大寺諷誦文稿』は九世紀前半の願文類創作の実態を伝える、貴重な資料である。

一方、『東大寺諷誦文稿』には対句のない段落（C）も多い。合計28段落112行で、内容は教義の解説が多く、説教や法話の原稿であったと思われる。

Cの段落の例として、「辞無碍解（詞無碍解）」という仏教語について説いている第20章段（140行～154行、第36～38段落）を挙げる。「辞無碍解」とは仏菩薩の持つ能力の一つで、あらゆる言語に到達している能力のことである。この章段は、

辞無碍解の解説と蓮の例話（140行～145行）、青い鳥の説話（146行～150行）、問答（151～154行）の三つの段落に分けられる。最初の段落（第36段落）は、辞無碍解の解説と金色の蓮の花の例話である。

- 140 [各]世界 講説正法者詞无碍解 謂大唐 新羅 日本
波斯 混嶺
- 141 天竺人集 如来一音随風俗 方言令聞 仮令¹⁹↓此当国
方言 毛人方言
- 142 飛驒方言 東国方言 仮令対飛驒国人而飛彈詞²⁰↓令
聞↑²⁰而説云 如訳語
- 143 通事云 仮令南州有八万四千国 各方言別 東弗等三
州准之 六天
- 144 ↑¹⁹対大唐人而大唐詞説 他准之 対草木而草木辞而説者金
色蓮華^{フサ}千茎本 往詣仏所
- 145 七匠与仏物申 余人不聞知唯仏聞知 俱談答花所
申^{対鳥獸而鳥獸辞而説} 者^{給ニテ}

各世界ニ於テ、正法ヲ講説スルハ、詞无碍解ナリ。謂ク、
大唐、新羅、日本、波斯、混嶺、天竺ノ人集レバ、如来ハ一

音ニ風俗ノ方言ニ随ヒテ聞カ令メタマフ。仮令バ^{クトヘ}【19此当国ノ方言、毛人ノ方言、飛驒ノ方言、東国ノ方言、仮令バ飛驒国ノ人ニ対ヒテハ、飛驒国ノ詞ヲモチテ（20聞カ令メテ）、説キタマフ云。訳語通事ノ如シ云。仮令バ南州ニ八万四千国アリ、各方言別ナリ。東弗等ノ三州ハ之ニ准フ。六天】大唐ノ人ニ対ヒテハ、大唐ノ詞ヲモチテ説キタマフ。他ハ之ニ准フ。草木ニ対ヒテハ草木ノ辞ヲモチテ説キタマフ。金色ノ蓮華^{フサ}千茎ノ本アリ。仏ノ所ニ往キ詣リテ七匠シテ仏ト物申シキ。余人ハ聞キ知ラズ。唯仏ノミ聞キ知リ給ヒテ、俱ニ談ヒ給ヒ、花ノ申ス所ニ答ヘタマフ。鳥獸ニ対ヒテハ、鳥獸ノ辞ヲモ説キタマフトイヘリ。

(140～154行)

ほとんど仮名を書かず、簡潔な変体漢文で書かれている。辞無碍解の能力のある仏は、どの世界、どの国の言葉でも法を説くことができる。まるで通訳のように、各国それぞれの方言で説法をする。草木には草木の言葉で語り、鳥獸には鳥獸の言葉で語る。金色の蓮華千茎が仏に詣でたときも、仏は誰にもわからない言葉で花と語り合っていたという。

次の段落（第37段落）の青い鳥の説話は、『東大寺諷誦文稿』に記載される説話として最も長いものである。⁽¹⁸⁾

- 146 初時教時五百青鳥^{斑飛}来聞経⁽²¹⁾ ↓ 大小如雀^{オホコナ} 鷄鶴双伏聞法 白狗聞
- 147 経 獼猴奉蜜物申 仏与彼鳥獸詞而共話 ↑ 21 仏説畜生道難^多 鳥申ク
- 148 我先造何業作鳥 仏言汝等昔慳貪嫉妬深 毘波尸^脚仏時國王儲大^{无違}
- 149 会^{汝等}参寺見物^テ耳不奉礼仏 不聞法反 慳貪嫉妬故作鳥 詣寺故今日值遇仏
- 150 汝等聞経故脱鳥身生天 後作五百阿羅漢 鳥聞仏説乍悲乍喜^{云云ト}以上

初時教ノ時ニ、五百ノ青キ斑アル鳥飛ビ来リテ経ヲ聞ク。
 (21) 大小^{オホコナ}雀ノ如シ。鷄鶴双ビ伏シテ法ヲ聞ク。白キ狗経ヲ聞ク。獼猴、蜜ヲ奉リテ物申ス。仏ト彼ノ鳥獸ノ詞ヲ共ニ話シタマフ。仏、畜生道ノ難多キコトヲ説キタマフ。鳥申サク、我先ニ何ノ業ヲ造リテカ鳥ト作レルトイフ。仏ノ言ハク、汝等ハ昔、慳貪ニシテ嫉妬深カリキ故ニ鳥ト作リキ。毗波尸^脚仏ノ御時ニ、國王、无遮ノ大会ヲ儲ケシニ、汝等寺ニ参レドモ、物ヲノミ見テ、仏ヲ礼シ奉ラズシテ、法ヲ聞カズシテ、反リテ、慳貪嫉妬ナルガ故ニ鳥ト作レリ。寺ニ詣リシガ故ニ、今

日仏ニ値遇シタテマツレリ。汝等経ヲ聞ケルガ故ニ、鳥ノ身ヲ脱レテ天ニ生マレ、後ニ五百阿羅漢ト作ラムトノタマフ。鳥、仏ノ説ヲ聞キテ、乍イハ悲シビ乍イハ喜ブ云云ト。以上。

(146行～150行)

「辞無碍解」の能力を備えてあらゆる言葉を理解する仏と、五百羽の青い小鳥たちとの説話である。片仮名の使用はごく少なく、会話を主体にして簡潔に筋が運ばれている。

初時教⁽¹⁹⁾の時に、鳥や獣たちが集まって法を聞き、仏は畜生道には難の多いことを説教した。雀ほどの大きさの青い小鳥たちは、なぜ自分たちは畜生である鳥として生まれたかと尋ねた。仏は、汝らは過去世に寺に詣でも仏に礼せず法を聞かず、慳貪で嫉妬深かったためであると教えた。しかし今、仏に値遇し、経を聞いたので、次の世では畜生道を逃れて天に生まれ、後に五百の阿羅漢となるであろうと説いた。鳥たちは仏の説教を聞いて、悲しんだり喜んだりした。

聖フランチェスコの小鳥への説教を思い起させる説話である。仏伝經典に、釈迦が菩提樹下で成道した時に五百の青雀が飛来して右邊したとあるが、この説話は説かれておらず、原拠は未見である。類話として、『雑宝藏経』巻第八、『賢愚

経』巻第十三等に、五百の雁が仏の説法を聞き、獵師に殺された後に忉利天に生まれ、須陀洹果を得た説話がある。⁽²¹⁾

説話に続く問答の段落(第38段落)は、次の通りである。

151 是名辞无碍解 何ソイカニ 仏知一切衆生言辞 仏昔流

輪六道生死 受无

152 不トイフ受給生 宿ヤトリ給タリ 无不トイフ宿ヤトリ給所

153 歷生皆悉 今成仏得宿命智知過去 得詞无碍解 知過

去所経言辞

154 故上ハ天辞中ハ人辞下蚊ハフ虫辞ニ知ヲ 彼カ辞⁽²²⁾↓而同

彼説↑⁽²²⁾名辞无碍解

是ヲ辞无碍解ト名ヅク。何ニソ仏ハ、一切衆生ノ言辞ヲ知リタマフヤ。仏ハ昔、六道生死ニ流輪シテ、受ケ給ハズトイフ生无ク受ケ給ヒ、宿リ給ハズトイフ所ナク宿リ給ヒタリ。生ヲ歴シコト皆悉シタリ。今、仏ト成リテ宿命智ヲ得テ、過去ヲ知レリ。詞无碍解ヲ得テ、過去ニ経シ所ノ串習、言辞ヲ知レルガ故ニ、上ハ天ノ辞、中ハ人ノ辞、下ハ蚊ハフ虫ノ辞ニ至ルマデ彼ガ辞ヲ知ルヲ、(22)彼ト同ジク説キタマフ) 辞无碍解ト名ヅク。

(151行～154行)

仏は宿命智通という神通力を備えているため、自分が六道を輪廻転生した時のことを全て記憶している。そのため、あらゆる衆生の言葉を理解できるのであるという。この段落には片仮名が多く書き込まれ、補助動詞「給フ」も使われ、滞りなく読める日本語文となっている。

『東大寺諷誦文稿』には問答形式の文章が十か所ある。「段落一覧」の「備考」欄に「問答」と書いてある段落で、ほとんどが対句を用いない文体（C）である。問の部分は簡潔で、答が教義や仏教語の解説となっている。平易な言葉による解説が多いため、学僧の間でおこなわれる議論ではなく、法会の次第の一つとして聴衆に聞かせるものではなかったかと思う。ほとんどの問答の段落、特に答の文章に仮名が多く書き込まれている。聴衆が耳で聞いて理解しやすいように、口語に近い文章を書くとしていたのではないであろうか。

以上のように、『東大寺諷誦文稿』の文章は、対句または対句に近い句を含んで構成される文体の段落（A・B）と、対句のない文体の段落（C）に大きく二つに分けられる。A・Bは原則的に願文類の文章である。また、Cの段落の中でも、ほとんど変体漢文のままの段落と、片仮名を多く書き込んだ段落に分けられる。説話は仮名が少ない変体漢文で記

され、問答は仮名が多い傾向がある。所々にみられる仏伝は、短文や語句のみの段落（D）が多く、「護明云 白象云 右脇云」（158行）などのように、語句を並べる書き方をしている点特徴的である。仏伝は筆者が語り慣れていたため、キーワードを書くだけで十分であったのかもしれない。

四、ヲコト点と朗読（80～122行）

最長の章段である第17章段（80～122行、第29～31段落）には、墨書の上に朱筆で仮名（傍書）・ヲコト点・返り点・句切り点・連絡線などが書き加えられている。『東大寺諷誦文稿』のヲコト点は朱書のこの部分だけである。中田祝夫は、ヲコト点は喜多院点に近い特殊点で、句読点・区切り点が多く返り点が雑多なことなどから、「古拙の時代の相を示しているのではないか」と述べている。⁽²²⁾

父母追善供養の文章で、95行と100行のあとにそれぞれ1行分ほどの空白があり、三段落に分かれている。

一段落目（80～95行、第29段落）は、「且主某甲」が薬師如来を本尊とする法会を行うことを述べ、父母と三宝の恩の尊さを讃えている。二段落目（96～100行、第30段落）は、且

82 者云、夫^⑬↓報恩高行↑^⑬世雄之尊徳ハ、魏々難量測、

大乘之妙典ハ、蕩々^車牢^{カクシレ}双^{オウ}こと、

80〜82行の中に朱筆で二本の連絡線⑫⑬が引かれており、連絡線の始点と終点で挟まれた部分には、朱筆の書き入れがない。122行までに合計7本の朱の連絡線が引かれているが、すべて同様である。

82行の「量」「巨」「クラヘ」に朱筆で訂正線が引かれている。墨筆で「双」に「クラヘ・ナラフ」の両訓を書いていたものを、「クラヘ」を消して「ナラフ」を採用している。朱の加筆の段階でも文章を推敲していたことがわかる。

83行からは、雪山童子や薩埵王子などの仏の前生譚を対句で列挙しており、80〜82行から引き続いて駢儷体の文章である。

83 是以、世間出世二難^ク値^キこと難^キレ聴^キこと、无上尊ノ教ナリ^{ナリ}なり、天上天下に最勝最尊坐^⑭ことは、三寶ノ

84 境界ナリ^{ナリ}なり、是以雪山之太子ハ^{第八}為^ニに八字^八命^{セリ}を施^{セリ}羅刹、薩埵王子ハ、為^ニ苦提^一身を

85 捨^ニ飢虎^一、四恩中に難報難ハ^レ窮者^一 不^レ過^ニ父母之

恩^ニには^一、所以 須闡太子ハ割^{ハク}ニ

86

身^ノヲ^一濟^セ父母カ命^ミ、忍辱太子は穿^レて眼^ヲ療^{イヤ}リ^ニ父病^ノ、(以下略)

日本語の語順になっている「命を施セリ羅刹」(84行)を除いて、ほぼ全てに返り点が打たれている。連絡線の中を除いて、書き入れの通りに読み下すと、次のようになる。平仮名はラコト点で、(一)内は書き入れがなく補読した文字である。

今日、且主某甲、三尊の福庭を掃^{ハラ}(ヒ)灑^{ソウ}(キ)、四徳の寶殿を莊嚴(ス)。薬師如来ヲ供養(シ)、八講ノ法会(ニ)奉仕(セムト) 志スハ云。夫(レ) 世雄ノ尊徳ハ、魏々(トシテ) 測(ルコト) 難(シ)。大乘ノ妙典は、蕩々(トシテ) 双^{オウ}ブ(ル) こと牢^{カクシレ}シ。

是(ヲ) 以(テ)、世間出世二値^キフこと難^クク、聴(ク) こと難^キキは、无上尊ノ教なり。天上天下に最勝最尊(ニ) 坐(ス) ことは、三寶ノ境界なり。是(ヲ) 以(テ)、雪山童子ハ、八字(ノ) 為^ニに命を羅刹(ニ) 施セリ。薩埵王子ハ、菩提(ノ) 為^ニに身を飢虎(ニ) 捨

(テタリ)。四恩(ノ)中に報(イ)難ク窮(メ)難
 (キ)は、父母(ノ)恩には過(ギ)ズ。所以(ニ)、須
 闍太子ハ身ヲ割(ハ)リテ 父母ガミ命(ヲ)濟(ヒ)給ヒ、
 忍辱太子は眼ヲ穿(チ)て、父ノ公(ノ)ミ病を療(イ)ヤ
 (セ)り。

(80〜86行)

語の読みだけではなく、語序や句の切れ目が朱の返り点や句読点によってほとんど確定されているため、迷わずに読み下すことができる。筆者はおそらく、事前に墨筆で作文した原稿に、実際に朗読をする段階になって朱筆で加点したのであろう。

漢文は、片仮名を駆使して一語一語の読みかたを示しても、日本語文として読み下すためには、句の切れ目や述語目的語等の位置を確認しながら読み進めていかなければならない。朱筆で細かく書き込まれた句切り点や返り点などは、法会で流暢に朗読するために書き加えられたものと思われる。

『東大寺諷誦文稿』は、文案を書き留めるだけではなく、法会でそのまま朗読台本として使われることもあったものと思われる。願文類として奉納する場合には、新しい料紙にあ

らため、訓点のない漢文を浄書したことであろう。

五、朗読と「けり」文(211〜227行)

『東大寺諷誦文稿』の文章は基本的に漢文訓読文であるものの、この文献の特徴として、いわゆる漢文訓読語以外の語彙や用法を多く含んでいることが知られている。⁽²⁵⁾

もっとも非訓読的な調子が強いとされているのは、「誓詞通用」の見出しのある211〜227行(第60段落)である。願文類の文章で、「我が父母」と施主の立場で、亡き父母の恩と追慕の情を駢儷体の構成で述べている。『東大寺諷誦文稿』で使用されている助動詞「けり」七例は、すべてこの段落に含まれており、敬語や係助詞「ぞ(そ)」「こそ」も多用されている。

誓詞通用

我が父母ヲ思惟^{オモヒ}ミレバ、寒ヲ忍^{イデ}ビ、熱キヲ忍^{イデ}ビ給ヒ、我等二代リテ苦シキ目ヲ受ケ、朝夕ニハ哭キ叫^{ナゲ}ブ音ヲノミ聞カ令メ奉リ、御胸情ヲノミ煮碎キタテマツタリ。吉キ人ノ如ク我等ヲ思ホシテ、大臣ナラズ云。后ナラズ云。

太子ナラズ云。仏ナラズ云。寒シト申セバ脱ギテ給ヒシ
 (31)父公ハ、我ハ着ズトモ我子ニヲ着セムトゾノタマヒ
 ケル。飢シト申セバ分ケテ給ヒシ／ヒタリシ／(32)母
 氏ハ、我ハ食ハズトモ我子ニヲ給ハムトゾノタマヒケ
 ル。父公ガ摩キ給ヒシ頭ハ、父公坐サネバ摩キ(給
 フ)人モ无シ。母氏ガ整ヒ給ヒシ儀ハ、母氏坐サネバ、
 整フ人モ无シ。【(33)見レドモ見レドモ飽キ足ラハヌモノ
 ハ、父公ガ愛ニ念ホセリシ御貌ナリ。聞ケドモ聞ケドモ
 飽カヌモノハ、母氏ガ我ガ子ト召シシ御音ナリ云。屯輪
 摩ガ琴モ(34)麗シト雖モ、父公ガ慈シビノ麗シキニ益
 ギメヤ。輪王ノ裘モ(35)雖モ)母氏ガ悲シビノ厚キニ益
 ギメヤ云々。】大悲ノ芳シキ懷ヲ昼夜ノ眠ル所トシ、大恩
 ノ両ノ膝ヲ朝夕ノ遊ビノ庭トセリ。慈シビヲ含ミテ相ヒ
 咲ヒタマヒシ紅ノ貌ヲモ、今モ見テシカモヤ。首ヲ撫デ
 背ヲ叩キ給ヒツツ、忼怍シトノタマヒシ音ヲモ、今モ聞
 キテシカモヤ。鳥獸スラ祖ヲ見テハ喜ブル物ヲ、父君ヲ
 觀奉ラズシテ久シクゾ成リケル。母氏ヲ聞キ奉ラズシテ、
 年月ゾ歴ケル。(36)雨々リ風吹ク時ニモ、父君シ坐セバ
 物モ思ハズ、露霜置キ)彩シク坐ス可キ團嬾ノ紅ノ貌
 ハ、吾ガ曹ニ由リテゾ麻影ニ成リタマヒタル。安ラカニ

坐スベキ柔軟ノ玉ノ胸ハ、我等ニ由リテゾ千山ニ成リタ
 マヒタル。(37)霜ノ曉、雪ノタニハ、父公シ坐セバ物モ
 念ハズ、雨降り風吹ク時ニモ、母氏シ坐セバ憂ヘモ无
 シ。万ノ物ノ子、愛ツミカタシト雖モ、父公ハ愛ツミ
 カタシトモ宜ハズ。一ノ利モ无キ子ドモ等ヲコソ愛シト
 ハ宣ヒケレ。千ノ珍有リト雖モ、母氏ハ珍トモ宜ハズ。
 愚ニ癡ナル子ドモ等ヲコソ珍トハ宣ヒケレ云々。

(211～227行)

この段落には、『大乘本生心地観経』報恩品の影響が認め
 られる。(26)『大乘本生心地観経』は元和五年(弘仁元年、八一
 〇)の漢訳であるため、この段落はそれが日本に伝来して以
 降の創作である。『大乘本生心地観経』報恩品は、四恩(父
 母・衆生・国王・三宝)を説いていることで知られている。
 特に父母の恩について詳説しており、父母追善や祖先供養が
 盛んな日本仏教界において、伝来早々に流布したものと想像
 される。

次の文は『心地観経』を典拠とする例である。

母上味を得れば先づ其の子に与へ、珍妙の衣服も亦復是

の如し。

〔心地観經〕卷第二

飲食も湯薬も妙な衣服も、子を先にして母後なるを常則と爲す。

(同、卷第三)

寒シト申セバ脱ギテ給ヒシ⁽³¹⁾父公ハ、我ハ着ズトモ我子ニヲ着セムトゾノタマヒケル。飢^ガシト申セバ分ケテ給ヒシ／ヒタリシ／⁽³²⁾母氏ハ、我ハ食ハズトモ我子ニヲ給ハムトゾノタマヒケル。

(213～214行)

次の文も『心地観經』に拠るものと思われる。

母の胸懷を以て而も寢処と爲し、左右の膝上常に遊履を爲す。

〔心地観經〕卷第二

大悲ノ芳シキ懷ヲ昼夜ノ眠ル所トシ、大恩ノ両ノ膝ヲ朝タノ遊ビノ庭トセリ。

(218～219行)

これらの例のように、『東大寺諷誦文稿』は經文の語句をそのまま使用するのではなく、報恩品の文意のみを取り入れて、新たな表現に置き換えている。筆者の獨創性が強く感じられる段落で、「我が父母ヲ思惟^{オモヒ}ミレバ」と一人称で語られ

る父母への慕情を効果的に表現している。

例えば、訓読調の218～219行の後に、

慈シビヲ含ミテ相ヒ咲ヒタマヒシ紅ノ貌^{ミカホ}ヲモ、今モ見テシカモヤ。首ヲ撫デ背ヲ叩キ給ヒツツ、忼^{オモシロ}悌シトノタマヒシ音^{ミコエ}ヲモ、今モ聞キテシカモヤ。

(219～220行)

と、終助詞「てしかもや」を用いて追慕の感情を表す。その後、「ぞ（そ）ーける」、「ぞ（そ）ーたまひたる」、「こそーけれ」の係り結びが続く。

鳥獸スラ祖ヲ見テハ喜ブル物ヲ、父君ヲ觀^ミ奉ラズシテ久シクゾ成リケル。母氏ヲ聞キ奉ラズシテ、年月ゾ歴ケル。

(連絡線³⁶内省略)

彩^{カラハ}シク坐ス可^{グザリニ}キ團^{ミカホ}變ノ紅ノ貌ハ、吾ガ曹^{トモガワ}ニ由リテゾ、麻影ニ成リタマヒタル。安ラカニ坐スベキ柔軟ノ玉ノ胸^{ミムネ}ハ、我等ニ由リテゾ、干山^{カラヤマ}ニ成リタマヒタル。(連絡線³⁷内省略)

万ノ物ノ子、愛^ムツミカタシト雖モ、父公ハ愛^ムツミカタシトモ宣ハズ。一ノ利モ无^ムキ子ドモ等ヲコソ、愛シトハ宣

ヒケレ。千ノ珍有リト雖モ、母氏ハ珍トモ宣ハズ。愚^{オロカ}ニ
癡^{カクナ}ナル子ドモ等ヲコソ、珍トハ宣ヒケレ云々。

(220～227行)

この文章の読み手は法会の聴衆を前に、係助詞「ぞ(そ)」「こそ」をはさみこんで、一句一句、情感を高めながら読み上げたことであろう。

非訓読語を積極的に取り込んだ章段であるが、基調にあるのは駢儷体の漢文である。『心地観経』を翻案して文章を作成し、非訓読語を取り混ぜて訓読している。学問の場で漢籍や仏典の訓読をする際には、訓読語と非訓読語の位相の違いは無意識にも意識的にも守られていたものと思われるが、法会などの朗読の場ではその垣根が比較的ゆるやかで、新しい表現の工夫が許容されていたのではないであろうか。

『竹取物語』は最古の仮名文字と位置付けられている。阪倉篤義は、『竹取物語』において、「けり」止めの非訓読文的性格の文章が、訓読文的性格の文章を包むという形で構成されていることを指摘した。

「き」が、過去の事象をそれとして主観的に回想する態度を表はすに對して、「けり」はむしろ過去の（あるい

は過去からの）事象を、ある程度客観視して、これを常に現在との関連といふ立場においてながめようとする態度を示すといってもよからう。それが、ある事柄を、前からさうであつたのに今初めて気づいた、といふ形で述べることになるのであつて、そこに現在の感動がこめられるのであつた。⁽²⁷⁾

『竹取物語』の作者は、物語の輪郭を、物語るにふさわしい「なむ…ける」「ぞ…ける」という形式の文で描き、その枠付の中に、男性である作者が用いた訓読文的性格の文章で筋の展開を写したのであるという。

竹取物語における、以上のような二重的な構造は、恐らくこの物語にとつて本質的なものであり、その成立以来のものである。その成立の年代を正確に言うことは依然として不可能であるけれども、ただ天安・貞観（八五七—八七六）以前のものと推定される東大寺諷誦文稿にも、既に右のような両文体を共に用いて文章が創作されている事実は、記憶しておいてよいことのように思われる。⁽²⁸⁾

阪倉の指摘の通り、『東大寺諷誦文稿』にも、非訓読文的性格の文と訓読文的性格の文との「二重的な構造」が認められ

る。非訓読文的文章として、前掲の211～227行（第60段落）が筆頭に挙げられる。「けり」を使用した情感的な文章である。もう一方の訓読文的性格の文章は、第三節でとり上げた青い鳥の説話（140行～154行、第37段落）などが挙げられるであろう。仮名をほとんど使わずに変体漢文で記されており、簡潔に訓読されたものと思われる。『東大寺諷誦文稿』の筆者も、『竹取物語』の作者同様に、非訓読的な文体と、筋の展開を叙述するにふさわしい訓読文的な文体を、文章の内容や目的によって使い分けていた。早くも、天長承和年間頃と思われる『東大寺諷誦文稿』において、仮名物語の時代を迎える準備が始められていたのである。

『東大寺諷誦文稿』と『竹取物語』は、成立時期にも内容にも隔たりがある。両者に共通点を求めるとしたら、朗読された文章であるということであろう。玉上琢弥によれば、『源氏物語』以前の昔物語の作者は漢学者であり、読み手は女房たちであった。のちに、作者が漢学の素養のある女房達に移ったが、「うちのうへの源氏の物語人によませ給ひつゝ、きこしめしけるに」（『紫式部日記』）というのが物語の本来の楽しみ方で、「耳を通して楽しむ、それも人によませてきくのである。こうしてはじめて物語りになるのである」とい

う。⁽²⁹⁾

そもそも、漢文の訓読は音読・朗読するために行われた。朗読された文章は、声と耳を通じて複数の人々に享受される。漢風文化の興隆は、同時に朗読文化の勃興でもあるといえよう。学問の場も、仏事法会も、女房達が集う後宮も、朗読がおこなわれる場であり、その場に居合わせた人々はすべて文章の享受者である。聞き手の反応は、文章の作成に少なからぬ影響を与えたであろう。漢文訓読文が非訓読語を取り込み、和文（仮名文）へと展開していく過程には、おそらく平安初期に始まる朗読の流行が関与していたものと想像する。

六、おわりに

九世紀は、知識と論理を漢文に学び、訓読と朗読によって日本語の文章を修練する時代であった。

萬葉歌の時代から、韻文においては「漢詩」に対して「和歌」があることが自覚されており、文芸における「漢」と「和」の対比概念が確立していた。しかし、散文においては、萬葉後期の山上憶良や大伴旅人らによる和漢融合の作品であっても、序などの文章は必ず漢文の役割であった。萬葉仮名

で和語を連ねるだけでは、構成と「あや」をそなえた「文章」とはならない。長い間、「文章」とは漢文のことであった。ようやく、「漢文」に対比しうる「和文」を提示できるようになるのは、十世紀初頭の『古今和歌集』仮名序の時代である。

『東大寺諷誦文稿』における漢字片仮名交じり文は、和文（仮名文）が成立するまでの過渡期の文体として位置付けられる。日本語文ではあるが、原則的に漢文の語序で記され、片仮名は漢字に付随して書かれ、漢文訓読文の枠の中にとどまっている。

『東大寺諷誦文稿』の文献としての最大の特異性は、おそらくは全体が朗読のために書き下ろされた文章であることであろう。基本的に漢文訓読文であるが、仏典や漢籍を読解のために読み下したのではなく、口頭で読み上げることを目的として創作された日本語の文章である。そのために、片仮名を駆使して多様な語彙による表現も試みられたのである。

395行からなる本文は、表「東大寺諷誦文稿段落一覧」に示したように、97段落に分けられる。総じて、仏事法会のために書かれたものと思われるが、用途目的にしたがって文体が

使い分けられている。駢儷文の段落（A）は法会などで読まれる願文類の文章や文句で、全体の四割強を占める。推敲の跡が多くみられ、筆者の文章製作の心髄であったことがうかがえる。Bの段落はそれに準ずる。対句のない段落（C）は、教義の解説、問答、説話などである。問答は仮名を多く使い、説話は簡潔な変体漢文で書くという傾向がみられる。また、仏伝は、覚え書きとして語句や短文を列挙するDの段落が多い。

漢文の訓読と朗読によって鍛えられた日本語の文章は、やがて、和歌の文字である平仮名と、和歌によって磨かれた大和言葉に出会い、「和文」として独り立ちする。『東大寺諷誦文稿』における漢字片仮名交り文は、漢文訓読を足場として日本語独自の文体の模索を始め、「和」の文章の成立に向かつて一歩を踏み出した時代を物語る遺産である。

注

- (1) 『華嚴文義要訣（決）』は、新羅・表貝述『華嚴文義要訣（華嚴文義要訣問答）』。正倉院文書『華嚴宗布施法定文案』（天平勝宝三年五月二十五日付）の章疏目錄に「華嚴文義要訣一巻^{集法}」と見える。延暦寺蔵『華嚴要義問答』（行福筆、重要文化財）と同本。
- (2) 山田孝雄「東大寺諷誦文并華嚴文義要訣解題」（一九三九年複製本附録。『典籍雜攷』収録、宝文館、一九五六年）。

(3)

山田孝雄は鶴飼徹定による『東大寺諷誦文』の命名について、「この文は華嚴文義要決の紙背に記したるものなれば、これは東大寺の宗旨たる華嚴宗にて用ゐたるものならむとの推定によるものなるむ」と述べている(注②)『解題』。附録の冊子には、外題「華嚴文義要決東大寺諷誦文解説」、山田孝雄「東大寺諷誦文并華嚴文義要決解題」、田山信郎「東大寺諷誦文釈文」とあるが、田山信郎の「釈文凡例」には「東大寺諷誦文稿」と書かれ、複製本の題箋(辻善之助揮毫)には「東大寺諷誦文稿」と記されている。複製本製作の途中で『東大寺諷誦文』から『東大寺諷誦文稿』に改題されたものと推測される。山田孝雄「典籍雜攷」には、「東大寺諷誦文稿并華嚴文義要決」の題で解題が再録されている。

(4)

橋純一「東大寺諷誦文稿を読む(一)」(三三)『国語解釈』第四十六・四十七・四十九号、一九三九年十一月・十二月・一九四〇年二月、亀井孝「国語研究資料の影印三種」(『言語研究』第六号、一九四〇年十一月、同「東大寺諷誦文稿の「コ」の仮字について」(『文学』一九四六年四月)、築島裕「東大寺諷誦文稿小考」(『国語国文』第二十一巻第五号、一九五二年五月)、同「平安時代の漢文訓読語につきての研究」(東京大学出版会、一九六三年)など。

(5)

211頁28行に「大乘本生心地観経(唐元和五年、八一〇年訳出)を翻案した文章がみられるため、八一〇年(弘仁元年)を『東大寺諷誦文稿』成立の上限とする。(拙稿「東大寺諷誦文稿の成立年代について」、『国語国文』第六十巻第九号、一九九一年九月)。亀井孝が指摘したように(注④)亀井論文参照)、『東大寺諷誦文稿』において片仮名の「コ」が上代特殊仮名遣いの甲乙二類に書き分けられている。この区別は天長頃から徐々に失われていったと

みられるため、『東大寺諷誦文稿』の成立の下限を天長承和頃と考える。

(6)

春日政治は、「(片仮名交じり文の資料について)而してこれら訓点の年代について已述の推定が許されるならば、この文体は已に天長前後には存在したと言ひ得る」と述べている(『片仮名交じり文の起源について』、『文学研究』一九三二年、『古訓点の研究』所収、風間書房、一九五六年)。

(7)

注②山田孝雄「解題」。

(8)

中祝夫は『東大寺諷誦文稿の国語学的研究』において、ヲコト点法が法相宗の点法に似ていることと、内容においても法相唯識に関するものが見受けられることから、法相宗の僧徒の筆になるものではないかと推測している(第一章第五節)。本文の内容には天台教学の受容も認められるが、法相教学に最も近いと思われる。(拙稿「水の中の月」『東大寺諷誦文稿』における天台教学の受容について)『成城国文学論集』第三十五輯、二〇一三年三月、『東大寺諷誦文稿』と最澄『願文』―四弘誓願の受容と「檀主の法会」―、『成城国文学論集』第四十二輯、二〇二〇年三月)。

(9)

築島裕『日本語の世界5 仮名』(中央公論社、一九八一年)第二章参照。

(10)

以下、『東大寺諷誦文稿』の原文翻刻は行頭に算用数字で行数を示し、書き下し文は文末の括弧内に行数を示す。行数は築島裕『東大寺諷誦文稿総索引』に従う。丸数字は連絡線の番号。原文翻刻は連絡線の始点を、終点を↑で示す。書き下し文では、連絡線で囲まれている部分を()内に示し、入れ子になっている場合は外側を【 】内に示す。その他、拙稿「東大寺諷誦文稿注釈(二)―11〜40行―」(『成城国文学論集』第三十六輯、二

- (11) ○(一四年三月)「『東大寺諷誦文稿注釈(八・結)』350頁行」(同第四十三輯、二〇二二年三月)参照。
柴田雅生は、『東大寺諷誦文稿』の付訓が、漢字のA脚部・B右傍・C左傍の位置に分類され、内容はI全訓・II語頭訓・III語尾訓に分類されると整理し、「B及びCの位置の付訓は、Aに対して補助的な位置にあり、内容はより具体的である」こと、その事情として「行の上から下へ漢字と仮名の区別なく順番に書き記し」「一句一行を書き終えた後、或いは全文を書き終えた後に、B及びCの位置に仮名を補うこともあったのではないかと思う」と述べている(『『東大寺諷誦文稿』の付訓方法について』、『国語学研究』26、一九八六年十二月。乾善彦は、『東大寺諷誦文稿』の仮名の位置と文中の機能の面から四種六類の用法に分け、「いわゆる変体漢文が文章の基調としてあり、仮名による日本語注記をどのような形で埋め込むかというその方法の試行錯誤が、みえきたように、ひとつの資料中にさまざまな姿となつてあらわれている」と理解できる」と述べている(『部分的宣命書きからみた『東大寺諷誦文稿』、『女子大文学』国文篇第五十二号、二〇二一年三月)。
- (12) 「見一空井。傍有樹根。即尋根下。潜身井中。有黑白二鼠。互齧樹根。於井四辺有四毒蛇。欲齧其人」(『仏説譬喻經』)。「二鼠競争、而度目之鳥旦飛、四蛇争侵、而過隙之駒夕走」(『萬葉集』巻第五、山上憶良「日本挽歌」前の詩文)。
- (13) 春日政治『西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究』(『春日政治著作集』別巻、勉誠社、一九八五年)参照。
(14) 『日本古典文学大辞典』第四巻(岩波書店、一九八四年)、『東大寺諷誦文稿』の項(築島裕解説)。
(15) 後藤昭雄『平安朝漢詩文の文体と語彙』(勉誠出版、二〇一七年)第9章において、広義の「願文」を「仏事の場において祈願の意を述べるために用いられる文章」とし、狭義の「願文」を、表白文・発願文・知識文・廻文・願文・諷誦文などの分類の中の「願文」として、区別して論じている。本稿で「願文類」とするのは、前者の広義の「願文」に相当する。『東大寺諷誦文稿』の文章を狭義の文体に分類することができるかどうかは、それぞれの文章様式が確立した時期の考証を含めて検討する必要がある。
- (16) 『遍照発揮性靈集』巻第七、『統性靈集補闕鈔』巻第八所収。但し、『統性靈集補闕鈔』は清暉が承暦三年(一〇七九)に三巻を編して『遍照発揮性靈集』の散逸した巻第八・十を補ったもので、空海作の真偽が問われる作品も混入している。
- (17) 注(15)後藤書「9 平安朝の願文」参照。
(18) 『東大寺諷誦文稿』には、紀国の文の説話(200行、第53段落、千の夫人の説話(259・261行、第71段落)、子無き王の説話(301行、第76段落)がみられるが、すべて1・2行の短文で、出典未見である。
- (19) 初時教は、法相宗の三時教(仏一代の教を三時に判じたもの)の第一時「有教」に当り、釈迦牟尼仏が成道後に、鹿野苑で小乗四諦を説いた時の説法。
- (20) 『過去現在因果經』巻第三、「仏所行讚」巻第三など。
(21) この説話は、『撰集百緣經』巻第六、「諸教要集」巻第二、「法苑珠林」巻第十七などにも収録され、『三宝絵』などにも引かれている。「林ノ中ニシテ法ヲ聞キシ鳥ハ、切利天ニ生レテ楽ヲウケキ」(『三宝絵』中)。
- (22) 注(8)中田書第一章第二節参照。
(23) 小峯和明氏が指摘しているように、『東大寺諷誦文稿』には十一名の孝子の名がみえるが、そのうち四名(重尺・

会稽・宏提・畢悛）は他に用例がみえない（小峯和明『中世法会文芸論』六十六頁、笠間書院、二〇〇九年）。『会稽』は、孝をもつて聞こえたという会稽三康（孔愉・張茂・丁潭）か。

- (24) 83行「(无上尊ノ)教」と84行「(三寶ノ境)界」の右傍の「丁」の仮名または符号について、拙稿「東大寺諷誦文稿注釈(三)——80行、122行——」(『成城国文学論集』第三十八輯、二〇一六年三月)では、田山信郎(複製本釈文)・築島裕(『東大寺諷誦文稿総索引』翻刻)にしたがい、「カ」と翻字した。しかし、文意が不明のため、本稿では注(8)中田書にしたがい「ナリ」の符号として改めた。中田は『金光明最勝王經註釈』(飯室切)平安初期点に「丁(ベシ)」の符号があることも紹介しており、「ナル」ベシ」である可能性もある。

- (25) 注(4) 築島裕論文及び同『平安時代の漢文訓読につきての研究』第七章第二節参照。

- (26) 注(5) 拙稿参照。

- (27) 阪倉篤義「竹取物語における「文体」の問題」(『国語国文』第二十五卷第十一号、一九五六年十一月)。

- (28) 阪倉篤義「解説(竹取物語)」(『日本古典文学大系9 竹取物語 伊勢物語 大和物語』岩波書店、一九五七年)。

- (29) 玉上琢弥「昔物語の構成」(『源氏物語研究—源氏物語評釈』別巻一、角川書店、一九六六年。岩波現代文庫『源氏物語音読論』に再録。岩波書店、二〇〇三年)。

23 『東大寺諷誦文稿』の文体について——附・『東大寺諷誦文稿』段落一覧——

『東大寺諷誦文稿』段落一覧

章段	段落	始-末行	行数	漢文体	仮名	連絡線	見出し	備考
1	1	1-7	7	B	有		言辞	文字擦消。料紙に損傷あり。感応道交について。
2	2	8-15	8	B	有	1～3 始点		文字擦消。料紙に損傷あり。布施の功德について。
3	3	16-17	2	B	有			文字擦消。料紙に損傷あり。「波斯匿王・法華会」。
4	4	18-19	2	B	少	3 終点		文字擦消。料紙に損傷あり。減罪について。
5	5	20-26	7	A	有	4		文字擦消。料紙に損傷あり。無常について。
6	6	27-30	4	B	有		六種	「昔世殖善」から始まる。供養の功德について。
7	7	31-37	7	B	有	5～7		父母追善供養。
	8	38-39	2	B	有			「摩訶仙人・花天女」。
	9	40	1	D	少			「某仏之平等大悲ハ、不簡尊卑云」(12字と仮名のみ)
	10	40	1	D	無			「宿寶王樹云」(5字のみ)。
	11	40	1	D	無			「沙羅樹云」(4字のみ)。
8	12	41-46	6	C	少	8 始点		『悲華經』『方広経』『因果経』『摩訶摩耶経』の引用。
	13	47-48	2	C	無			仏伝。「正法」「像法」。
	14	49	1	D	無			「四比丘入塔懺悔、作四方四仏云」(13字のみ)
	15	50-51	2	C	少			仏伝。「千輻輪相」。
	16	52	1	D	無			「敬礼天人云。敬礼常住三寶云」(11字のみ)
	17	53-54	2	B	無	8 終点	勸請言	仏の勸請。
9	18	55	1	B	無		止	「帝釈宮・祇桓寺」。
10	19	56-57	2	B	少			感応道交について。
	20	58	1	D	無			仏伝。「勝鬘夫人」「韋提(希)」。
	21	59	1	D	無			「帝釈宮有因陀羅網云」(9字のみ)。
11	22	60	1	D	有			父母の恩。
12	23	61-62	2	A	少			「補陀主」(観音菩薩)。
13	24	63-64	2	C	無			「瑠璃寶宮」(薬師仏浄土)。
14	25	65-66	2	C	有		勸請発句	無常について。
15	26	67-69	3	A	有		自他懺悔混雑言	無常について。
	27	70-74	5	A	有	9・10		無常について。
16	28	75-79	5	B	有	11		問答(親の魂の所在について)。父母追善供養。
17	29	80-95	16	A	有	12～16		朱筆の加点。父母追善供養。
	30	96-100	5	A	有			朱筆の加点。父母追善供養。
	31	101-122	22	A	有	17・18		朱筆の加点。父母追善供養。
18	32	123-125	3	B	少			文字擦消。母の病臥。
	33	126-128	3	C	有			文字擦消。母の墓葬。
	34	129-132	4	A	有			文字擦消。父母追善供養。

章段	段落	始-末行	行数	漢文体	仮名	連絡線	見出し	備考
19	35	133-139	7	A	少			父母追善供養。
20	36	140-145	6	C	少	19・20		詞（辞）無碍解について。
	37	146-150	5	C	少	21		説話（青鳥の間経）。
	38	151-154	4	C	有	22		問答（辞無碍解について）。
21	39	155-156	2	C	有			問答（無上尊について）。
22	40	157-163	7	D	無		釈迦本縁	仏伝。託胎から成道まで。
	41	164	1	D	無			仏伝。「仏昇切（利天）」。
	42	165	1	D	無			仏伝。「曲腰像尺云」（5字のみ）。
	43	165	1	D	少			仏伝。「貧女腐汁ユスル。奉縁云」（7字と仮名のみ）。
	44	166-167	2	D	少			仏伝。「薩埵王子」。
23	45	168-173	6	B	有		慈悲徳	仏の慈悲について。
24	46	174-179	6	B	有	23		仏の恩について。
25	47	180-184	5	B	有	24		寺と僧の恩について。
26	48	185-186	2	C	無			問答（問。仏・維摩詰・観音菩薩・地藏菩薩について）。
	49	186-189	4	C	有			問答（答。仏・維摩詰・観音菩薩・地藏菩薩について）。
27	50	190-196	7	C	有	25始点		問答（浄土と穢土について）。
	51	197-200	4	C	有	25終点～ 28始点		人・餓鬼・地獄・天・菩薩の世界について。
	52	200	1	C	有			切利天について。
	53	200	1	C	無	28終点		200行左傍書。説話（紀国の文）。『冥報記』『靈異記』。
28	54	201-204	4	B	有	29		対機説法について。
	55	204-207	4	C	有	30		「己所不欲云々」（『論語』巻第六）。殺と誹謗について。
	56	204-206	3	A	少			囲み線、「不」の字で抹消。一目の羅の譬喩。
	57	207	1	D	無			「悽蔑云々」（4字のみ）。
29	58	208-209	2	C	有			「法主」の父母追善について。
	59	210	1	B	有		誓通用	囲み線。無慈悲な親について。
	60	211-227	17	A	有	31～37	誓詞通用	父母追善供養。助動詞「ケリ」使用。
	61	228	1	B	少			「百石讃歎」に類似する文。
30	62	229	1	B	少			報恩供養について。
31	63	230-231	2	C	有			囲み線。仏の法力成就の願。
32	64	232-236	5	B	無			文字擦消。六波羅蜜と四弘誓願。
33	65	237-241	5	A	有			文字擦消。無縁の死者の供養。
34	66	242-245	4	D	無	38始点		四弘誓願。
	67	246-252	7	A	有	38終点		求法の故事、懺悔と大乘経の讃嘆。
35	68	253	1	B	有			「天鼓・摩尼珠」。
36	69	254-255	2	B	有			「凝霜・露杼」。

25 『東大寺諷誦文稿』の文体について——附・『東大寺諷誦文稿』段落一覧——

章段	段落	始-末行	行数	漢文体	仮名	連絡線	見出し	備考
37	70	256-259	4	B	有			火葬について。父母追善。
	71	259-261	3	C	少			説話（千の夫人）、他。
38	72	262-277	16	A	有	39～47	慰誘言	「大旦主」讃嘆。
	73	278-284	7	C	有	48		「大旦主」の先祖が建立した「堂」の讃嘆（例文）。
39	74	285-299	15	A	有	49～53	卑下言	法会導師である自らの謙遜、衆僧・出席者の讃嘆。
	75	300-301	2	B	無	54		求法の功德について。
	76	301	1	C	無			説話（子無き王）。
40	77	302-303	2	D	無			陀羅尼や偈頌の功德について。
41	78	304-313	10	A	有	56・57	誓通用	無常について。
	79	313-321	9	A	有	58		無常について。
42	80	322	1	D	無			「在今地東方ニ」（6字と仮名のみのみ）。
43	81	323	1	D	無			『千手経』。
	82	324	1	D	無			「南無千手」。
44	83	325-331	7	B	有	59		「東西国亡霊」の供養。
45	84	332-336	5	B	有		注	「某経」讃嘆（例句の列举）。
46	85	337	1	D	無			「仏恩賀沐不合」（6字のみのみ）。
47	86	338	1	D	無			「仏爪上置土云」（6字のみのみ）。人身の得難さの譬喩。
	87	338	1	D	無			人身の得難さの譬喩。
	88	339-349	11	C	有	60～62		問答（天人・仏となる方法について）。
48	89	350-351	2	D	少			同体三宝について。
	90	352-354	3	D	少			自観と他観について。『華嚴経』。
49	91	355-361	7	C	有	63始点・64		問答（生死は何から始まるか。無明について）。
	92	362-366	5	C	有	63終点・65始点		問答（無明を断つ方法について）。
45	93	367	1	B	少			「俱尸羅鳥・諸仏菩薩」。
	94	368-378	11	A	有	65終点、66		信心について。
46	95	379-388	10	C	有	67始点		問答（成仏の方法について）。
	96	389-391	3	C	有			問答（金剛座について）。
	97	392-395	4	C	有	67終点		三宝の恩について。

- ・章段と段落の区切り方については本文2頁参照。
- ・行番号及び連絡線番号は『東大寺諷誦文稿総索引』汲古書院に準拠した。
- ・漢文体の欄の記号は以下の通りである。
 - A＝主に対句で構成されている文章。
 - B＝一部に対句、または字数の整わない不完全な対句を含む文章。
 - C＝対句を含まない文章。
 - D＝短文、語句のみ。
- ・仮名の欄は、片仮名が書かれていない段落を「無」、平均して1行につき1か所以下の段落を「少」、それ以上の段落を「有」とした。
- ・備考の「○○・○○」は、対句の句頭で対応している語を示した。